



目 次

【論考・提言・実践報告】

「アメリカのチルドレンズ・ミュージアム訪問調査からの報告」

JMMA理事 高橋 信裕 2

【時の話題】

JMMA共催事業「関東支部及び実践部門研究部会の企画・実施事業について」報告

JMMA理事 関東支部および実践部門研究部会幹事 奥野花代子 ... 10

【九州支部会報告】

九州国立博物館における教育普及事業「あじっば」

九州国立博物館 学芸部企画課 ミュージアム・エデュケーター 吉田 公子 ...14

九州国立博物館誕生と太宰府天満宮

太宰府天満宮社務所 総務部長兼文化研究所主管学芸員 味酒 安則18

【掲示板】

会員の大変表彰（奥野花代子さん）19

【インフォメーション】20

論考・提言・実践報告

「アメリカのチルドレンズ・ミュージアム 訪問調査からの報告」

JMMA理事

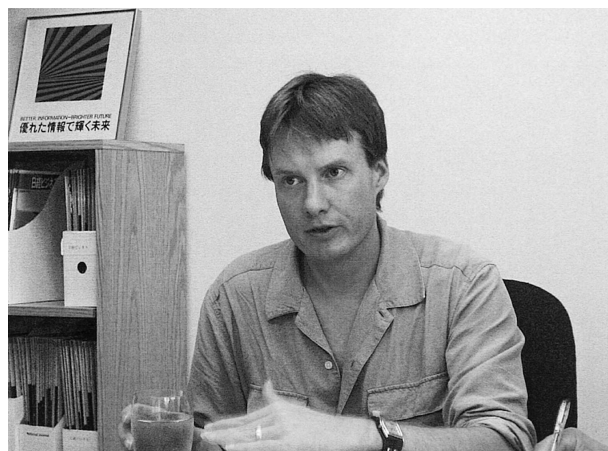
高橋 信裕

平成17年、JMMAでは「財団法人新技術振興渡辺記念会」より研究助成金を受けて「科学技術人材育成における早期教育に適した新形式科学館等の開発研究『海外における早期教育の先行事例調査研究』」を行った。申請は高橋信裕本学会会員が代表者となり、調査研究の内容はJMMA内に実行委員会を組織し、意見交換や報告会、研修会等を通して詰めていった。これらの成果をもとに、数名の実行委員によって、平成17年10月7日から18日にかけてアメリカにおける先進事例の訪問調査を実施した。なかでも、アメリカ博物館協会（AAM/ American Association of Museums）及びチルドレンズ・ミュージアム協会（ACM/ Association of Children's Museums）の担当職員から聞き取りした内容は、全米におけるミュージアムの現状を把握するのに、大いに役立った。本会報で、彼らから聞き取った成果を報告する。現地で個々に訪問調査したチルドレンズ・ミュージアムに関する詳しい内容は、助成財団へ提出する報告書にまとめられており、今後増刷し、有償で頒布することを検討している。有償での増刷頒布に関しては著作権者の了承等が必要となるため、時間的な猶予が必要とされる。当面、この報告書に代わるものとしてカルチベイト27号（文化環境研究所発行）があることを報告しておく。ダイジェスト的な内容であるが、文化環境研究所からは、これら一連の調査に対して、物心両面にわたって協賛をいただき、かつ種々便宜をはかっていただいた。

AAM及びACMからの聞き取りについては、AAMは、シニアマネジャーのエリック・レッドベター（Erik・Ledbetter）氏、ACMは、ジャネット・ライス・エルマン（Janet・Race・Elman）女史が担当された。日時と取材場所については、以下の通りである。会場を提供してくださった三菱総合研究所の方々には、深く感謝申し上げたい。

・取材日：2005.10.07.2:00～5:00

・場 所：三菱総合研究所ワシントンDC事務所



エリック氏



ジャネット氏

■AAM/ American Association of Museums

1. AAMの役割

アメリカの文化教育行政は、連邦政府から独立した地方政府（州政府）がそれぞれ独自に行う制度をとっている。連邦政府が所有する博物館（国立）も数少ない。したがってアメリカ全土における博物館の発展、促進は、AAMが一元的に統括し、各館に助言、指導、支援等をする役割を負っている。

2. AAMの活動概要

アメリカは国が大きく、博物館の数も多いことから、組織も階層型になっている。AAMには、さまざまなジャンルの博物館、さまざまな規模の博物館が加入しており、その下に専門分野ごとの組織（協会）がある。すなわち、子ども博物館協会、科学技術博物館協会、美術博物館協会などである。AAMは、こうした組織の全てを網羅した機関で、役割は、政府に対しての対応窓口で、ロビー活動が主となっている。つまり、博物館を守るための働きかけを行っている。

3. AAMが関心を寄せる課題

アメリカの博物館は、法律、税法上、私企業で非

営利団体であるものの、公益団体ではないといった位置付けにあり、法律上の優遇制度もある。博物館という社会教育的スタンスから教育機関としての意識があり、また、一方ではビジネスといった経済的な価値を創り出す機関でもある、という意識がある。非営利団体であるので、利益を上げることが主ではないが、経費分の収入を確保する努力が求められる。

(1) 資金調達

AAMでは、金融、財務、運営資金について研究を進めている。また、博物館の命綱である資金源とその獲得、調達方法について調査を行っている。

博物館の運営資金は、連邦政府から補助金が、少ないものの出ている。しかし、その資金源は一本化されていない。また、その補助プログラムも継続的なものはない。補助金を出す省庁の評価も省庁によって、まちまち、ばらばらである。

(2) 博物館の標準化

AAMでは限られた研究資金のもとで、大小の規模に関係なく、博物館を幅広く捉えて、その標準化に力を入れている。博物館を対象とした独自のプログラム開発は行っていない。ただ、アメリカの伝統でもあり特性の一つだが、「学び」についてのスタンダードが国として確立されてこなかった。つまり、多様性を重んじてきたアメリカには、「学び」に対する一律の制度、標準化されたものが、歴史的にない。その裁量は、各州の地方政府に委ねられ、各州がそれぞれ決めて、行ってきた。近年、ブッシュ大統領が、ノーチャイルド・ビハインド（落ちこぼれの無い子ども）という方針を打ち出し、暗に全国的なスタンダードを求めているが、それにしても全国共通のテストの実施などのような具体的な施策は連邦政府からは出されていない。

こうした国情であるため、博物館の標準化づくりに関しても、アメリカという一国レベルでの標準化は難しい。各州の博物館が、それぞれの州のスタンダードに合わせていくことになる。博物館は学校ではないので、標準化には難しいものがある。

観客についての調査は、AAMでは行っていない。観客調査は各博物館に委ねている。

(3) 海外との交流

現在、国務省では博物館職員の交流を目的に、海外の博物館と連携し合うプロジェクトを立ち上げている。博物館は、ジャンルを限らず、どの分野でも構わないことになっている。アセス

メントについては、日本に学ぶことが多いので日米共同で取り組むことも考えられる。次回の申請は2007年になるが、JVでの取り組みを考えてみてはどうか。詳しい内容は、AAMの黄色のパンフレットにも載っているし、Web上でもアクセスすることができる。

4. 博物館の活動資金

(1) 活動資金の内訳

一般的に、アメリカの博物館の運営資金は、その1/3は地方政府も含めた政府からの補助金（中央政府よりも地方政府からの資金が多い）、1/3は博物館自身の事業収入（入館料収入、カフェ・レストラン収入、ミュージアムショップ収入）、あとの1/3は、財団や個人からの寄付やメンバーシップ（会員）からの会費収入である。

政府や民間の間に数多くあるファンドシステムが中央集権的でなく、ばらばらであり、こうした資金源の獲得が博物館の課題であり、大変である。

(2) 大きな比重を占める「財団」の助成金獲得

アメリカには、博物館に資金を提供する財団がNSF（国立科学財団）ともう一つIMLS（Institute Of Museum & Library Service）がある。IMLSはアメリカ連邦政府の議会が法案を通過させて設置した機関で、連邦政府から独立した機関である。資金を受ける条件として過去5年間のアウトカム（成果）の報告書の提出が義務付けられている。これまで、評価の中心は利用者数だったが、IMLSの場合は、その事業で利用者が何を学んだかを求めている。補助金の中に、そうした評価のための経費も計上されている。ただし、これらの評価を比較分析したものはない。もっとも、民間からの助成金には、評価を求めない場合もある。

5. アメリカの博物館の新しいトレンド

アメリカの博物館には今、ダイナミックな新しい波が起こっている。従来型のパーマネントエキジビジョン（常設展示）でない展示が主流をしめつつある。例えば、触ることのできる展示、壊れてもかわらない展示物の採用、地域に伝承されてきた身近な道具への関心の高まりなど、鑑賞中心だった展示から実験的な来館者の五感に訴えかける展示へと様変わりしてきている。

(1) 共稼ぎ家庭が増えるアメリカでは、「フレンドリー」が博物館のキーワード

「フレンドリー」という言葉も、博物館のキー

ワードになっている。グランドペアレンツ（おじいちゃん、おばあちゃん）が孫の手を引いて博物館にやってくる。そこで家族間のコミュニケーションが図られ、交流の絆が一層強められる。アメリカでは、両親が共稼ぎの家庭が多くなっており、子どもと祖父母が博物館で一日を楽しく学んで帰るスタイルが多くなっており、博物館のターゲットにもなっている。

(2) 一般化している「ユニバーサル」な施設整備への視点

また、博物館では、段差を無くしたりする建築的な改善も、高齢者や障害者に対する対応から、乳児、幼児を同伴する家族らへの配慮（乳母車等の対応）を視野に入れた「ユニバーサル」な視点が一般化している。CMでも「入りやすい博物館」ということで賞を受けた館もある。

(3) アメリカの博物館は「市場原理」によって動く
アメリカには、中央集権的な伝統がなく、ローカルで考え、対応していくという考えが根深くある。そこには、多様性の大切さを重んじる考えがあり、その多様性を動かすのは、市場原理である。博物館を研究し、調査し、評価した結果よりも来館者がエキサイトし、楽しんでくれる、これで上手くいく、といった六感的なセンスが、そこには求められる。

6. 学校との連携

エリック・レッドベター氏がボランティアを務めているトラム・ミュージアム（乗り物博物館）で先年、州の教育方針と学校のスタンダードに合わせた展示替えが行われた。学校のスタンダードに合わせなければ、学校が来てくれないからである。しかし、そこには大きな問題が認められる。つまり、これまでは博物館の展示は、博物館自身で決めていたものが、州の教育方針に従ったものに移行することで、博物館の独自性が失われかねないのである。

7. 地域社会と博物館

アメリカでは社会貢献を目的とした民間のグループ、組織が多い。それらのグループは、最近まで男性と女性に分かれ活動していた。こうしたグループがCM設立の原動力になっていた。保護者やリーグが学校以外に教育の場が必要ということで、積極的になっていた。

(1) 1960年代の意識変革

アメリカでは1960年代に大きな意識の変革期があった。それまでの権威に対する懐疑的な気運が高まり、自分達は、自分達自身で学ぶ、と

いう風潮が一般化し、その時代の子どもたちが大人になって、自分達の子どもの教育環境にはCMが相応しいということになったのではない。1970年代以降のCMは、子ども達が主役となって、遊びながら学ぶ「実験の場」となっている。また、1970年代は、学校教育の現場でも実験的な教育が流行した時代でもあった。グループ学習が盛んに提唱され、その影響のもとに教室を仕切る壁が可動式になったり、なくなったりした。今日では、その反動からまた元に戻りつつあるが。

(2) 1975年のチルドレンズミュージアム（CM）設立ブームの背景

1975年ころにブームとなった市街地の再開発との連動によるCMの増加は、同時に施設づくり に当てる費用の縮減にもつながった。建築費用も少なくて済み、また常設展示をなくすることで費用の削減が出来た。

(3) エンターテインメントのジャンルに位置付けられる博物館

アメリカの博物館が、経済領域の中で、どのジャンルに属しているかといえば、エンターテインメント（娯楽）の中に位置付けられる。博物館は、映画や演劇、スポーツと競合する関係にある。博物館に対して利用者は、余暇を活用して知識を得て楽しみたい、といった欲求をもつ。その一方で、主な対象者である子どもたちはクラブに入り、クラブ活動に時間を取られる。そこに時間の取り合いが生じる。上から無理に博物館に行くことを強要できないこともあり、展示には、教育と娯楽の両立が求められる。

■ACM/ Association of Children's Museums)

1. ACMの活動概要

ACMは、科学博物館をはじめ家庭や家族にサービスをする博物館をターゲットにしている。現在、メンバーは275館であり、その大半はアメリカ国内だが、世界中に広がっており、メンバー館からの相談に乗っている。事務職員は8名という小さな所帯だが、その分対応が早いのが特徴である。例えば、先日のミシシッピを襲ったハリケーン「カトリーナ」でチルドレンズ・ミュージアム（CM）の2館（ニューオリンズ、ミシシッピ）が被害を受けたが、ACMでは早速会員全てに連絡を取り、資金集めや援助に貢献した。

ACMの活動における優先順位は、1番が災害援助、2番目がメンバー館への対応になっている。できるだけ早い対応が望まれている。



カトリーナ募金

ACMは、会員制で年1回大会を開催している。2006年の年次大会は、ボストンで予定されており、4月24日～26日の3日間開催される。

(1) 海外のCM救済にも貢献するACM

財政難で閉館されようとしたCMをACMが救った事がある。オランダのアムステルダムにある「キンダーミュージアム」の救済である。閉館される予定だった「キンダーミュージアム」をアメリカからオランダの文化庁に運営を継続して欲しいとの要望の手紙を送り、結果として予算がつき、運営が続けられるようになった。このCMは2年ごとに展示替えが全面的に行われ、状況の中に身を置くような劇的な演出で知られている。10年前に行った時には、オーストラリアのアボリジニーの展示をしていて、感動的な体験を味わったことが忘れられない。

2. アメリカにおけるチルドレンズ・ミュージアム(CM)の役割

チルドレンズミュージアムの概念はアメリカより起こった、という誇りと伝統がアメリカにはある。

CMの役割には「親の教育」が取り込まれており、情報は親向きに用意されている。子どもとともに親の教育に役立つように配慮されている。また、CM職員は感情を上手くコントロールできない子どもたちが陥るさまざまな状況に、ちょうど見合った立ち居振舞いをする訓練を受けており、親にとっても教育のいい見本となる。

CMのもう一つの役割に「教師への教育」がある。いじめ問題を解決するとともに、教師を対象としたプログラムである「皆を尊敬しよう」(Respect for All)にも組んでいる。Webサイトにもまた、「respect

for all.org」が公開されているので参考にして欲しい。

さらにCMは社会福祉面での役割も担っている。フィラデルフィアの「プリーズタッチミュージアム」



プリーズタッチミュージアム

では7歳以下の子ども達のための新館を計画中である。場所は、低所得者層地帯を予定しており、裁判所と連携した活動がユニークである。家庭争議を抱える大人たちが家庭裁判所を訪問する時、子ども達は、その待ち時間に裁判所に出向いたCM職員と交流するプログラムが立てられている。CMのアウトリーチ活動の一環だが、CMでは、この他「子ども病院」に、職員が出向いて入院中や外来の子ども患者と交流体験するプログラムが用意されている。「ロードアイランド・プロビデンス」というCMでは、離婚した両親のうち養育権のない親が子どもとの対話、交流を行う場に使用されている。そこでは、社会福祉の職員とCMの職員が立会っている。CM職員は、親に子どもへの態度や振舞い方を伝え、いい手本となっている。また、10代で母親になった女性へのプログラムが、社会福祉と関連し成功を納めている。この成功はCMの資金源である企業家に効果をもたらし、資金集めに一役買っている。

3. アメリカのCMの現況

(1) 平均的なCM像

① 施設及び予算規模

CMの施設規模、予算的規模については大小さまざまあり、建築規模的で言えば300平方フィートから30万平方フィート。年間予算では20万ドルから1200万ドルとそれぞれあるが、平均的なCMは、建築規模が4万平方フィート、予算は100万ドルから200万ドルであ

る。

② 主な対象者

a. 低年齢層化するCMのターゲット

CMの対象は0歳児から12歳児にしているが、最近の傾向としては「幼児教育」に力を入れている。したがって、0歳児から8歳児をターゲットとし、「シカゴ子ども博物館」のように、そうした対象を念頭に展示替えを行うCMが多くなってきている。

その背景には、8歳を過ぎると子どもの置かれている環境が変わり、課外活動やサッカーなどのスポーツに時間を取られたりようになる。家族もそうした子ども達と行動をとるようにするようになる。こうしたことから自然とCMのターゲットは低年齢層化し、0歳から8歳までの子どもを対象とするCMが増えてきている。

b. 0歳児～2歳児を対象とした「プレイスペース」の隆盛



プレイスペース

一方、0歳児～2歳児の乳幼児には特別のプログラムが用意されはじめているのも近年の特徴である。幼児教育の専門家が参加しての「特別な場」づくりが行われている。ボストンCMでは30年ほど前に0歳～2歳児専用のスペースを設けた。「プレイスペース」と呼ばれる施設がそれで、ジェリー・ロビンソン (Jeri Robinson) という女性が携わったことで知られている。以後、アメリカのCMでは、プレイスペースが設けられるようになってきており、ジェリーは現在でも、ボストンCMに在籍し、そのジャンルのパイオニアとして有名な存在になっている。

③ 活動資金

a. 資金の調達方法

アメリカでは、政府が博物館に補助金などで手を差し伸べることはない。館から申請することで、そのチャンスに預かる場合もあるが、多くの場合、ナショナルサイエンスファンデーション (国立科学財団) に博物館から補助金申請をすることで、資金調達をしている。ボストンCMもそこから資金を得ている。

ACMでは「フリーマンファンデーション」という財団 (アメリカの家庭にアジアを知ってもらうことを目的とする財団) から資金提供を得た。「アジアの文化を学ぶ」といったテーマの巡回展に700万ドルの資金獲得が実現し、7ヶ所のCMが巡回展会場に選定された。7館のうち2館は日本をテーマに取り上げている。内容は、それぞれ「四季」 (会場:ブルックリンCM) と「アニメ」 (会場:ミネソタCM) で、あとは、中国、韓国、ベトナム、モング (HMONG/山岳民族) などが取り上げられる。700万ドルの中には、評価のための予算も含まれており、うち8万ドル (年2万ドル×4年) がその評価に当てられる。評価は、外部のリサーチ会社に依頼する。調査内容は、来館した家族への質問、例えば「見る前」と「見た後」のアンケートなどが盛り込まれる。ACMでは、以前にアジアに関する全国調査をしており、その際得たデータでは、多くのアメリカ人がアジアに示した興味は、フード (食べ物) である、ということであった。今回の巡回展は、これ以上の情報や知識を与えることが目的である。

b. 資金調達の手順

資金集めの手順だが、最初は地域の有志が小さなグループを組織して、非営利団体の手続きを取る。次に役員会 (Board) を設置する。役員はそれぞれ資金集めの人脈を持ち、戦略に対する計画を立案する。そして、資金集めの計画に取り掛かり、専門職員 (コーディネーター) 1人を雇用する。このコーディネーターが将来の館長でもある。将来の館長は日常の業務をこなすとともに、博物館の夢を語り資金づくりの立会いまで行い、館長以下の職員の人選に従事するなど多忙を極める。さらに、フィジビリティスタディ (FS) に歩を進める。このFSには2種類あり、一つは運営に関するもの、つまり建築規模、予算規模、経営の収支予測などで、もう一つは、キャピタルキャンペーン (資金集め) の可能性についてのもの。地域の所得水準、企業の本社の

数、その規模、財団の数などから資金調達の最終ゴールを予想する。このFSは、例えば、マッキンジー調査会社などの専門のコンサルタント会社に依頼する。こうした手法を取った事例にフィラデルフィアの新しいCMがある。そこでは、6300万ドルの数字がはじき出された。ワシントンDCでも、ショッピング街に立地するランファントプラザに国立のCMが計画されている。シーザーペリの設計によるもので、1億2000万ドルの一大プロジェクトである。イリノイ州のシカゴ市郊外グレンビューに、今年の10月16日にオープンするコール（COHL）CMは8歳以下の幼児を対象にしたCMで、地域にあったサイズ、45000平方フィートの建築規模と資金獲得の目標額を24000ドルとしたCMである。中心に立って推進しているのは、ウィスコンシン州選出の上院議員のシスターである。ただし現在、資金調達は、予定の額に届かない21000ドルに止まっており、不足分は銀行からの借金で賄っている。資金調達が予定額に達する前から、建設に動き出しているのである。この施設は、USグリーンビルディングカウンスル（審議会）よりグリーンビルディング銀賞を受賞している。環境に優しい建築方式を採用している点が評価されたためである。そして、CMづくりの仕上げとして、資金集めへと歩を進めるのである。

c. 運営資金の内訳

建設資金獲得後、オープンしてからの運営資金源は、大きく2つに分けられる。一つは博物館の事業活動からの収入。すなわち、入場料収入、ショップ収入、カフェ・レストラン収入、バースデイパーティなどのスペースレンタル収入。もう一つは、政府からの助成金や民間の財団からの補助金（GRANT）、個人からの寄付金である。民間の財団からの補助金は、あるプロジェクトのために、という条件付のものがあ、これは博物館にとっては、間接的な収入となる。補助金のうち20～25%は間接的なものである。博物館では、寄付金獲得のため資金集め大会を随時開催している。

d. 今後のCM計画と資金キャンペーン

現在、アメリカでは80館のCM計画がある。資金は、平均して1館1410万ドルを目標にしてお、各館で資金集めのキャンペーンが盛んに行われている。80館が必要とする予算額

の合計は約10億ドルにもものぼる。資金集めには、以前はジュニアリーグなどが当たっていたが、現在では資金集めの専門家が中心となって、キャピタルキャンペーンを展開している。専門家とは博物館での館長クラスの人々である。資金は、個人の資産家達や財団、企業などから寄せられる。州政府からも寄せられたりするが、その額は少ない。資金獲得の目標額が1400万ドルとすれば、100万ドル位で、1/10以下が普通である。そのうちの主なターゲットは50万ドルから100万ドルの大口を出資してくれる篤志家である。そうした篤志家は、博物館の入口に寄付者として名前が掲げられ、顕彰される。

③ 教訓として生かされるクラブディズニーの失敗

CMは子ども達への教育が前提となるミッションを担っている。民間では、クラブディズニーの全国展開が失敗したが、その原因は金銭的なものだった。CMで利益をあげる事は難しい。本当の意味での成功の評価は、来た家族が本当に楽しんでくれたかどうか、にある。黒字への努力はなされているが、収益が主ではない。この失敗がその後のCMのあり方に強く影響している。

ACMでは、CMの収支データを集計し報告書としてまとめている。

4. チルドレンズ・ミュージアム（CM）の職員の処遇

(1) 職員の所得

博物館職員の収入レベルは、一般企業の職員に比べて低額である。幼児教育に携わっている人々、非営利の団体職員、アートや芸術の関係者も同様に低所得である。CMの館長クラスの年収は、典型的な規模で8万ドル～10万ドルである。ただし、ボストンCMやシカゴCMなどの大型施設の館長は、20万ドル程度の年収がある。

(2) 民間人出身の館長

大規模CMの館長は、前職が民間の企業人の場合が多い。民間の企業人を館長に据えるには、民間と競合できる処遇の保障が求められる。また、そうでなければいい人材が集まらない。例えば、シカゴCM館長のピーター・イングラント氏はエリザベスアーデン社の元社長（CEO）であり、その顔の広さから資金集めに多大な貢献をしている。博物館は非営利団体のため、役員は基本的には無報酬（名誉職）だが、館長は

有償である。

a. 館長の呼称

館長の名称は、民間企業であればディレクター。非営利団体であれば、ボードメンバー (Board member)、トラスティ (Trustee)、チーフスタッフ、エグゼクティブディレクター、CEO、プレジデントなどが使用される。プレジデントの場合は、ボードのチェアマン (議長) をいう例もあり、この場合は館長ではない。ボードのプレジデントなのか博物館現場のプレジデントなのか、迷う場合もある。

(3) 職員のスキル

CM職員の専門的スキルについては、教育関係者は博物館教育のコースをもつ大学院で「ミュージアムリーダーシップ」という修士号を修得したスタッフが採用される。展示関係者には、建築学関係者や玩具業界の経験者が多い。案内係には、店員経験者が上手く適合している。

(4) 教育研究機関との連携

「シカゴ子ども博物館」は、シカゴのエリクソ



シカゴ子ども博物館

ン・インスティテュート (教育学の大学院を持っているので有名) と共同で展示の標準化を行っている。内容は、エリクソン・インスティテュートのWebで取り出すことができる。

(5) 海外との交流

ボストンCM等では「5人の友達と子ども達」展を開催したりしているが、ボストンCMではオープン (1970年代後半) 当初から、ボストン市と姉妹都市関係にある京都市の協力で京都の和式民家の移設が行われており、人気となっている。

5. チルドレンズ・ミュージアム (CM) の歴史と新しいトレンド

CMの歴史を概観すると、1960年代のCMは自然

の岩石などを展示する伝統的な博物館色を持つものであった。それが1975年頃から大きな変化が見られた。そのモデルになったのが「ボストンCM」である。倉庫街の一角をCMに転用したもので、マイケル・スポック館長のもとで実現した。この影響のもとに現在のCMがある。



ボストンCM

(1) 市街地の再開発ブームと多様な学びの場を求めた地域リーダー達たちの活躍

CMは1970年代半ばには25館しかなかったが、その時期に、子ども教育への関心が社会全体に広まり、多様な学びの場としてCMの役割が評価され、一種の設立運動が全国的に高まり、各地に誕生していった。同時に、その時期は市街地の再開発ブームにあり、その動きに連動する形でCMが計画され、建設されていった。当時は、学校教育とは結びつかず、草の根的に建設されていった。ある地域に誕生すると、自分達の地域にも欲しいといった形で、CMが徐々に増えていった。

(2) 「ジュニアリーグ」と呼ばれる地域コミュニティの立役者の活躍

1980年から1990年にかけて、CMが増えていったが、その牽引力となったのは、「ジュニアリーグ」と呼ばれる30歳から50歳代の女性を中心メンバーとなったサークルである。この団体が、CMづくりを積極的に推進した。

CMづくりの主導者は、1970年～80年にかけては、親や保護者たちであったが90年代以降はコミュニティのリーダーたちに移ってきている。

(3) 家族の「ファミリーラーニング」の場を目指すCM

学校には教育プログラムがあり、CMにも学校のスタンダードに合わせた展示はあるが、テストなどはない。CMは何となく学んでいく場

である。CM設立ブームの背景には、色々な方法で学んでいくべきだという考え方が基本にあり、家族みんなで楽しむ事が出来、しかもインターアクションが図られるという環境が評価されてきている。また、CM同士が競合するのではなく、情報を分け合って連携してきたことが、今日のCMの発展を支えている。

(4) ポップカルチャーをコレクションの領域に取り込むCM

イギリスで行われている昔の玩具を使ったプログラムは異世代間の交流を促進することで効果を上げているが、インディアナポリスのCMは、玩具のコレクションを持つ数少ない例として特筆されよう。ポップ（ポピュラー）カルチャーと呼ばれるジャンルのものである。



インディアナポリスCMの収蔵庫

(5) 小部屋形式の空間構成から大空間を基調にした構成へと変わるCM

近年、CMの空間構成に新しいトレンドが生まれてきている。乳幼児用の場を特定の1ヵ所から全体に散らばせるようになってきているのである。

① ファミリーの交流を促進する空間構成

CMを利用する親は、複数の子どもを抱えてやってくる。大きな空間をそれぞれ柵で仕切ることで、親は連れてきた子ども達を1ヵ所で相手し、監視することができる便利さが親たちに受けている。シカゴ市郊外のコールCMは、まさにこのトレンドを体現したものとなっている。

② 人気を呼ぶCMづくりのマニュアル本

CMづくりに関しては、そのマニュアル本まで出版されている。加除式タイプのもので、ビジョン、ガバナンス、建築家の選択、教育計画、展示手法、職員配置などが網羅されて

いる。

また、Webサイトに「CMを訪問しよう」があり、世界のCMにリンクすることができるようになっている。

6. CMに対する評価のあり方

評価に関しては、長期的な調査結果はない。ニーズはあるがデータがないのが現状である。CM独自に来館者が受けた印象を主としたビジター調査は行っているが、何を学んだかまでの質問はしていない。また展示に関しては、短期的であるがサンプルテストを行っている。見本（プロトタイプ）をつくり、想定通りの使い方をするか、想定外のことをするか、といった観点からテストを行っている。同時に、耐久性、安全性、そしてこの場合、何を学んだかのテストも行うものの長期的な評価はない。資金提供者が評価を求めるとしても、それぞれの立場から違った評価を求めてくる。一律ではない。統一化された評価基準はない。つまり、評価の方法は、各館がそれぞれ、それぞれの場合にしたがって行うということである。

(1) 大学機関と連携した評価手法

各CMでは貢献度についての調査はしている。例えば、ピッツバーグCMでは、ピッツバーグ大学と連携して評価を公開している。これはACMのサイトから入れば、Web上で公開しているので見ることができる。ただし、全国のCMの調査結果はない。 (文責：高橋信裕)

なお、本調査にあたっての実行委員会の構成は以下の通りである。

総 括：倉本 昌昭（JMMA理事）

委 員 長：許斐 修輔（財団法人つくば科学万博記念財団参事）

副委員長：高橋 信裕（文化環境研究所所長）

調 査 員：牛島 薫（千葉県教育庁教育振興部文化財課学芸振興室副主幹）

亀井 修（独立行政法人国立科学博物館展示・学習部学習課主任教育普及官）

齊藤 恵理（文化環境研究所主任研究員）

志子田敦子（チコラプラン代表）

田代 英俊（財団法人日本科学技術振興財団企画広報室次長）

原秀 太郎（JMMA理事）

松永 久（株式会社三菱総合研究所主任研究員）

松本 知子（松本知子事務所主宰）

三上 戸美（株式会社乃村工芸社文化環境カンパニープランナー）

湯浅万紀子（東京大学総合研究博物館ミュージアム・テクノロジー研究部門）



ミュージアムを核としたネットワークや町づくりの話題、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

JMMA共催事業「関東支部及び実践部門研究部会の企画・実施事業について」報告

JMMA理事 関東支部および実践部門研究部会幹事 奥野 花代子

共催テーマ：神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会“ミュージアム・リレー”第100走達成記念行事

「ミュージアム・エデュテインメント〔博物館楽修〕」

開催期日：2006年1月14日（土）～1月15日（日）

開催会場：箱根ガラスの森（第1部）、箱根宮ノ下・富士屋ホテル（第2・3部）、
箱根ラリック美術館（第4部）

会員参加数：延べ47名（第1部・14名、第2部・11名、第3部・13名、第4部・9名）

※開催当日は、JMMA会員以外の参加者も多数来場され、延べ200名の参加者でにぎわった。

JMMAでは「神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会」（WESKAMS）からの依頼を受けて、本年1月に開催された同会の“ミュージアム・リレー”第100走達成記念行事を関東支部及び実践部門研究部会の事業に位置づけて共催した。

WESKAMSとの共催事業は、先に第50走達成記念行事（2001. 11. 22～23）のほか、「“早春の箱根”にて美術館のCS戦略を学ぶ」（2003. 3. 8～9）をテーマに関東支部及び事業戦略部会とミュージアムショップ部会が共同で研究会を実施した実績がある。

WESKAMSの“ミュージアム・リレー”は、1997年10月から毎月1回、持ち回りで継続されてきており、2006年1月14日の午前に開催した箱根ガラスの森でのリレー実施で、第100走（回）目を迎えた。この達成を記念して、同日午後から翌15日にかけて、「ミュージアム・エデュテインメント〔博物館楽修〕」をメインテーマに行事が計画され、参加者はJMMAとWESKAMSの会員をはじめ、博物館関係者、一般の方など、延べ200名にのぼった。

行事は4部構成で、初日の1月14日（土）は、第1部「講演とカンツォーネの集い」、第2部「懇親夕食会」が行われ、翌15日（日）は、第3部「対談」と第4部「箱根ラリック美術館の特別見学」が実施された。

2日間に及ぶこの催しの準備には、1年近くが費やされ、開催当日は、箱根ガラスの森をはじめWESKAMS加盟館園の多大なご協力のもとにつがなく進められた。

近年の博物館は、その活動内容も多様化しており、各ミュージアムは様々な手法やサービスを駆使して、来館者により楽しめるよう心がけている。第1部は、WESKAMSの中でもとくに、その環境演出に工夫を凝らし、来館者の満足度を高めている箱根ガラスの森を会場に、レストランの3分の2ほどの席を貸し切って、「ミュージアムを一層楽しんでいただくための環境演出とミュージアム・ネットワーク」をサブテーマに、「講演とカンツォーネの集い」が華やかに開催された（写真1）。

講演はWESKAMSの5人の館長さん方により、各々のテーマで約30分ほど行われ（写真2・3）、各講演の合間に「カンツォーネ」が本場イタリア人歌手により催された。愛の歌やリクエストの多い曲が歌われ、一般のレストラン利用者とともに楽しい一時を過ごすことができた。

第2部は、箱根宮ノ下の富士屋ホテルに会場を移しての「懇親夕食会」であった。この会には、ご多忙のなか、小澤良明小田原市長や山口昇士箱根町長のほか、長崎歴史文化博物館長でもある大堀哲会長

も駆けつけ、祝辞が述べられた。さらに河野洋平衆議院議長や亀井善之衆議院議員、小坂憲次文部科学大臣、原義明小田原商工会議所会頭からの祝電も披露された。どの祝辞にも、今後ともなお一層、地域ミュージアムが連携し、生涯学習や地域文化の発展に寄与して欲しい、との期待が込められていた。

2日目の第3部は、趣のある富士屋ホテルの会議室で(写真4)、「ネットワーク時代の博物館のあり方を再考する」をテーマに、本学会が企画した「対談」形式の講演が行われた(写真5)。

「対談」が開始される前に、宿泊した参加者には富士屋ホテル側のご好意により、「登録有形文化財“富士屋ホテル”」の特別探訪が実施され、さらなる満足感を得ることができた。

第4部は、会場を「箱根ラリック美術館」に移し、オリエント急行の車両を含む特別見学が行われ、充実した行事が終了された。

今回の記念行事については、本学会とWESKAMSが、文化環境研究所のご支援とご協力を得て、“ミュージアム・リレー”第100走までの内容と資料を盛り込んだ報告書の発行(本年8月予定)を計画しているので、第1部の講演と第3部の対談について、その内容を次に簡単に報告する。

なお、WESKAMSの活動等は、本誌『会報』No.38に「地域ミュージアムが創りだすネットワーク活動～第100走を迎える“ミュージアム・リレー”～」(Vol.10 No.2.2005.9.30発行)と題して掲載されているので、ご覧いただければ幸いである。



写真1. カンツォーネを楽しむ参加者
(箱根ガラスの森レストランにて)

共催事業の講演と対談の概要

第1日目 平成18年1月14日(土)

○第1部「講演」

テーマ:「ミュージアム・エデュテインメントとミュージアム・ネットワークの意義」

講師: WESKAMS特別顧問 濱田隆士氏(神奈川県立生命の星・地球博物館 初代館長)

内容: テーマの「エデュテインメント」とは、「エデュケーション」と「エンターテインメント」を合わせた造語で、“ミュージアム・リレー”は、まさに「ミュージアム・エデュテインメント」である。第100走を達成できたのは、皆様が支えてくれたことが一番で、この地域のミュージアム・ネットワークの強い力による。

これは、この地域にあるミュージアムが一つの大きな博物館としてまとめ、 “ミュージアム・リレー”は「移動型の生きている博物館」として機能している。規模やジャンルにこだわることなく、広い視野で柔軟に対応している神奈川県西部地域のミュージアム・ネットワークは、意義深いものがあると、WESKAMSの“ゆるやかなつながり”を基本としたネットワークの重要性が説かれた。

テーマ:「美術作品を活かす施設演出と環境」

講師: 箱根ガラスの森館長 岩田正崔氏

内容: 箱根ガラスの森は、中世イタリア貴族の館をイメージして造り、主な展示品はヴェネチアンガラスである。それは15世紀のルネッサンスの華



写真2. 講演する箱根ガラスの森の岩田正崔館長

やかな時代に開花し、それを鑑賞することで、お客様が中世に旅したような感じになっていただくことに心がけている。美術館のどんな場所からでも、その匂いが感じられるように配慮している。

昨年8月に10周年を迎え、庭園には10本の光り輝く“フラッシュツリー”を飾り、春の花のチューリップを植え、お客様をお迎えしている。カンツォーネの鑑賞は、貴族の館の主人が自宅に招いて、“おもてなし”をし、楽しんでいただくというストーリーになっている。お客様が夢と感動をもって、お帰りいただけるよう「お迎えする心を大事にしたい」ということを力説された。

テーマ：「寄木に生きる・先人の偉業を後世に伝える～皇居御造営誌（明治宮殿）にみる寄木資料から～」

講師：本間寄木美術館館長 本間 昇氏

内容：箱根の寄木細工は今から170～180年ほど前、箱根の畑宿（昔は畑村）で始まったものである。昭和59年に伝統的工芸品として国指定を受けている。まず、木が持つ自然の色、約50種類を活かして組み合わせて「種板」を作り、これをカンナで薄く削り取った“ズク”を箱などに貼り合わせて作る。また「種板」をそのまま用いてワインカップなどを作る“ムク”の寄木細工の製品もある。

現在は寄木細工を手がけながら、先人の作品を複製したり、文献や資料を調査・研究し、先人の偉業を後世に伝えるべく努力をしている。ごく最近、美術館のコレクションの一つ、先人の作であ

る「静御前」に合わせて、二枚折屏風「義経 雪の吉野山」を木象嵌と寄木で制作したことが熱く語られた。また、皇居御造営誌（明治宮殿）の寄木資料が入手できたので、この研究も進めているとのことであった。

テーマ：「オリエント急行が箱根に～ルネ・ラリックの空間装飾～」

講師：箱根ラリック美術館学芸主任 橋本 公氏

内容：箱根ラリック美術館は、今から百年位前、アールヌーボーとアールデコの二つの芸術潮流の橋渡しをしたフランスの工芸作家、ルネ・ラリックを紹介した美術館である。

オーナーはもともとヴィンテージカーのコレクターであり、ルネ・ラリックもガラスでカーマスコットを制作しており、クラシックカーの収集からルネ・ラリックの作品収集へと入り、1,400点のうち250点が展示されている。

ラリックは小さな装飾品だけではなく建築装飾や空間装飾も手掛けた。その一つがオリエント急行の車両内の装飾である。

オランダのロッテルダムからパナマ運河を経由して3か月後に横浜港へ、そこからまた船で沼津港に、深夜大型トレーラーでゆっくりと箱根の山を上り、朝日を受けてシルエットで写しだされたオリエント急行の姿は忘れられない光景であると、箱根にオリエント急行が運び込まれた苦勞と熱意を話された。

テーマ：「博物館が子どもたちの夢を育む」

講師：神奈川県立生命の星・地球博物館館長

青木淳一氏

内容：子どもたちは感性が鋭く素晴らしい。本来、子どもたちは自然の物に興味を強く示し、常に、それに触れたい、あるいは持って帰りたいと願っているが、大人が良く理解せずに、そのことを禁じていることが多い。子どもは次から次へと興味を示すので、できれば、周囲の大人が、子どもの感性を高めたり、知識を加えることが大事である。博物館は子どもたちの夢を育むのに最適な場所で



写真3. 講演する本間寄木美術館の本間 昇館長

ある。

地球博物館でも、昨年の8月13日から12月10日の毎週土曜日に「館長と話そう」という相談日を設けて、子どもたちの様々な質問に応えた。子どもの目線で見たとことを大切に受けとめ、自然に対する感性を育てるよう、皆で努めているとのことであった。

第2日目 平成18年1月15日（日）

○第3部「対談」

テーマ：「ネットワーク時代の博物館のあり方を再考する」

講師：名古屋大学大学院文学研究科教授

和崎春日氏

文化環境研究所所長

高橋信裕氏

内容：近年、ミュージアムが経済活動の枠組の中で論じられることが多くなってきている。ミュージアムの存在と活かし方が、地域を活性化する重要な論点ともなっており、現在、話題になっている指定管理者制度もその延長線上で論じることができる。ミュージアムが文化の市場化とともに消費財として、また投機の対象として捉えられつつある現在、その資源の存在価値や利活用策を文化人類学的見地から見据えることは意義深い。

文化人類学という土地と人間に根ざした風土のDNAから、ミュージアムの基層部分を検証する試みは、今、最も求められていることではないだろうか。伝統がもたらす「聖」の部分、革新が求め

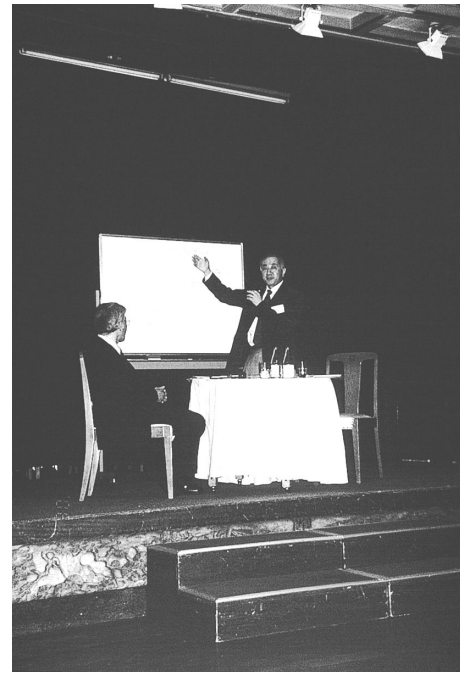


写真5. 講演する和崎春日教授（右）と高橋信裕所長（左）

る「俗」の部分から文化状況、ミュージアムのあり方、さらには今後の可能性が論じられていった。

和崎氏は専門分野の「京都五山の送り火」の伝統的民俗行事を例に、信仰から市民の文化が地域に根づいていることが語られた。

高橋氏はコレクションに加えて、マネジメントとコミュニケーションの重要性から、ミュージアムが社会や市民に支持を得るためにネットワークを構築、利用し、お互いが呼応しあう、“個”としての意気込みの必要性を強調された。

以上で、当日の概要を記したが、詳しくは報告書に委ねることとする。

今回の行事を開催するにあたり、JMMA会員の方、WESKAMSの皆様をはじめ、箱根ガラスの森、箱根宮ノ下の富士屋ホテル、箱根ラリック美術館には、多大なご支援・ご協力を賜りましたことを心から感謝申し上げたい。

（所属：神奈川県立生命の星・地球博物館）



写真4. 聴講する参加者
（箱根宮ノ下・富士屋ホテルの会議室にて）

九州支部会報告 九州国立博物館 における教育普及事業 「あじっば」

テーマ：九州国立博物館における教育普及事業「あじっば」

日 時：平成17年11月13日（日）

会 場：九州国立博物館

報告者：吉田 公子

（九州国立博物館 学芸部企画課 ミュージアム・エドゥケーター）

はじめに

九州国立博物館は2005年10月16日に開館した。日本で東京、京都、奈良に次ぐ四つ目の国立博物館である。九州国立博物館には「あじっば」という名称で親しまれている、親子のための体験型展示室がある。本稿ではこの「あじっば」における教育プログラムを紹介する。

「あじっば」とは

「あじっば」は当館の展示テーマ「日本とアジアの文化交流の歴史」を親子で体験できる場である。アジアの原っぱを略して「あじっば」である。この不思議な名前は、時間を忘れて遊ぶ原っぱのような場所になってほしいという意味をこめて名づけられた。「あじっば」はエントランスホール内にあり、入場無料である（写真1）。ここでは、作品との出会いを楽しんでもらうために、あえて文字情報は控えている。作品について知りたいことがあれば、「あじっば」専属のボランティアスタッフがいつでも対応してくれる。

「あじっば」は大きく分けて二つの活動エリアがある。入ってすぐ手前に広がる「ひろば」と奥の「あじぎやら」である。

「ひろば」での活動

すべてはフレアマーケットから

「ひろば」ではまず、アジアとヨーロッパの7カ国の屋台が国別にとり狭しと並ぶフレアマーケット

が目にとびこんでくる（写真2）。7カ国とは日本、韓国、中国、インドネシア、タイといったアジアの国々と、大航海時代に日本と交流のあったオランダ、ポルトガルである。これらの屋台では、各国の陶磁器、テキスタイル、伝統的な工芸品、宗教にまつわるもの、楽器、おもちゃ、生活雑貨を手にとれるように展示している（写真3-a, 3-b）。さまざまな色や形に溢れたこの通りを歩くと、異邦人の気分で各国の特徴を雰囲気を楽しめる。フレアマーケットを抜けると、左右に「たなだ」、「あじ庵」、「ボックスキット」などの新たな体験型展示が現れる。

たなだ

「たなだ」では、こどもたちが体を存分に使いなが



写真2 7カ国の屋台が並ぶフレアマーケット



写真1 エントランスホールにある「あじっば」



写真3-a 手にとって体験する



写真3-b 手にとって体験する

ら楽しめる展示を用意した（写真4）。階段状の展示ケースの上をのぼっていくと、そこには小さな穴が無数にあいた展示ケースがある。中を覗くと各国のミニチュアやジオラマが展開している。なかにはあたかも自分が面をつけたような錯覚に陥る仕掛けを施した展示ケースもある。



写真4 「たなだ」

「たなだ」は下へも潜っていける。床下では音や映像を楽しむ。これらの音や映像は7カ国の資料を収集する際に、録りためたものである。フレアマーケットの資料と直接繋がる貴重な資料である。ヘッドフォンからはこれらの国の雑踏や伝統音楽を聴くことができる（写真5）。床下の薄暗い空間で異国の生活音に包まれると、そこに暮らす人たちと自分がとても近くなったような気がする。画面では各国の生活の一場面を映し出している（写真6）。中国の映像では、都会の夜のネオンがまぶしい光景がひろがる。中国らしいモチーフのネオンが飾られた路面バスや、きらびやかなネオンサインのなかを人々が行き交う。タイでは市場や路地裏で僧侶が托鉢している。仏教が生活とともにあることがうかがえる。

これらのバーチャルな映像の世界を垣間見た後に、



写真5 床下で音を楽しむ

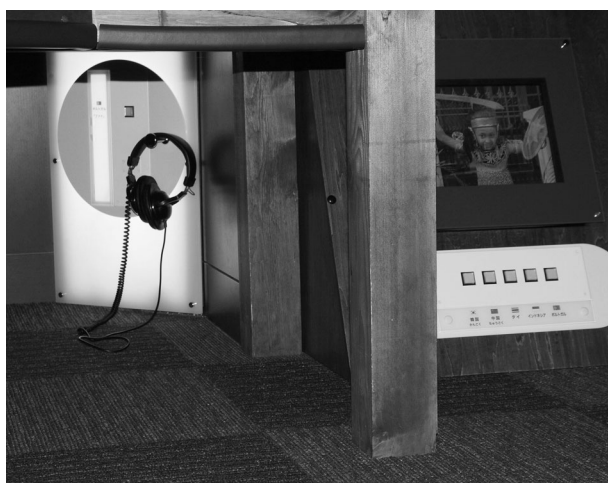


写真6 映像を楽しむ

フレアマーケットにもどると、見たばかりの資料を今度は手に取って確かめられる。それが楽しい。

ボックスキット

このコーナーには棚に13の箱が並ぶ（写真7）。これらの箱には“くみひもをつくってみよう”、“タッチ・ボックス”といったタイトルがついている。フ



写真7 「ボックスキット」

フレアマーケットの資料を色や形、素材をテーマに箱に収めている。一つのテーマで遊ぶこれらの箱をボックスキットとよんでいる。こどもたちはボランティアスタッフと話をしながらやってみたいボックスを選ぶ。

“くみひもをつくってみよう”というボックスは、中国、韓国、日本で同じように見られる吉祥結びを体験できる（写真8）。“タッチ・ボックス”は、木や漆、紙や織物、染色のテキスタイル、陶器、磁器といったさまざまな素材を触覚だけをたよりにあてるゲームである。ゲーム感覚で楽しめるので、知らず知らずに夢中になって、各国の文化の独自性や普遍性を体験できる。またフレアマーケットにもどると、新たな発見が待っている。



写真9 親子でごっこ遊びをする



写真8 くみひもを体験する



写真10 塗り絵や貼り絵でポジャギを体験する

あじ庵

「あじ庵」では、一つの国の生活や文化に焦点を充てた展示を行っている。第1回目は韓国のポジャギをテーマにしている。ポジャギとは端の布を繋ぎ合わせたパッチワークのようなものである。生活の知恵から生まれた。家のリビングに見立てた空間にポジャギが使われている生活を再現している。親子でごっこ遊びを通して、ポジャギの使われ方や日本と異なる食器の使い方を体験する（写真9）。フレアマーケットに行けば、食器という切り口から他の国と比較できる。塗り絵や貼り絵をしながら、ポジャギの色や形を体験できる活動も展開している（写真10）。またポジャギで使われる同素材でできたパズルは、形や色はもちろん素材の感触を確かめることができる（写真11）。こどもたちがつくった塗り絵や貼り絵の作品は、用意した壁に掲示している（写真12）。掲示されることによって「あじっば」との繋がりが生まれ、「また来たい」という気持ちになる。他のこどもたちもこれらの作品に触発されて、「私もやってみよう」という気持ちが高まる。



写真11 ポジャギ・パズル

「ひろば」ではこのようにフレアマーケットと他のエリアが、資料を通じて関連性を保ちながら、深まる活動を展開している。こどもがやってみよう活動を選ぶことにより次の関心が生まれ、できたという満足感が重なって自信につながる。これらの時間を親子で共有できる場所が「ひろば」である。



写真12 作品を掲示する

作品とじっくり向き合う「あじぎやら」

「あじぎやら」は“あじっぱ・ぎやらりー”の略。ひろばと厚いガラスで隔絶されている。静かな空間で、作品とじっくり向き合うことができる（写真13）。



写真13 作品をじっくり向き合う

壁一面の棚に教育資料を収めたトレイを並べている。これらの資料は教育事業のために収集した。中には梱包された資料もあり、収蔵庫のような雰囲気が伝わってくる。こどもたちは数あるトレイの中から好きな資料を選び、学芸員さんからの調査をギャラリースタッフと体験できる。作品の分量を測り、スケッチを行い、気づいた点をワークシートにメモする（写真14）。画一的な答えが求められる調査ではなく、参加者独自の視点を重んじ、作品をじっくり見るための活動である。調査の後は、作品の展示も自分でやってみる。重厚感のある展示ケースに、作品をより良く見せるためにふさわしい展示器具を選んで展示する（写真15）。これら一連の活動を“なりきり学芸員”と称して展開している。展示までを経験したこどもたちは、展示を身近に感じるようになる。



写真14 作品のスケッチをする



写真15 展示をしてみる

さいごに

当館での教育普及事業は「あじっぱ」内に留まらず、「あじっぱ」を拠点にひろがっている。その一つに“アート・ワゴン”がある。このワゴンはどこでも活動ができる移動式のワークショップセンターである。活動に応じた材料を搭載して移動する。エントランスホールや展示室に出して、常設の作品を目の前に活動することができる（写真16-a, 16-b）。エントランスホールでの活動は、より多くの来館者への教育普及事業のアピールにもなる。“アート・ワゴン”は主に家族連れの多い週末に活動している。

「あじっぱ」は週末と、修学旅行の学生や課外授業の一環でやってくる近隣の小学生の多い平日では、提供するプログラムが異なる。私たちスタッフは日々、「あじっぱ」で遊ぶ来館者の様子を観察しながら、プログラムの開発と改善を重ねている。今日やってきた子どもたちが、何時の日か今度は自分の子どもを連れて来てほしい。そんな永く親しまれるような博物館に成長していきたいと思う。



写真16-a エントランスホールでアートワゴンを出す



写真16-b エントランスホールでアートワゴンを出す

九州支部会報告 九州国立博物館 誕生と太宰府天 満宮

テーマ：「九州国立博物館誕生と太宰府天満宮」

日 時：平成17年11月13日（日）

会 場：九州国立博物館

報告者：味酒 安則（太宰府天満宮社務所 総務部長兼文化研究所主管学芸員）

明治32年2月、岡倉天心は「九州の地は古来外交の衝に当たりし要地にして云々、因って、九州に於て九州博物館設立の必要性を認む」と述べ、又これより先、明治26年7月、時の太宰府天満宮三十六代宮司西高辻信厳は、菅公千年祭を記念し、「鎮西博物館」の設置を計画し福岡県に上申し、許可を受け募金活動を始めたが、日清戦争勃発のため中止となった。

このように、九州に博物館をの構想は、明治、大正、昭和へと受け継がれ、昭和2年の菅公千二十五祭の年には、第五十二帝国議会に福岡県選出の代議士によって「九州博物館設置に関する建議案」を提出、衆議院本会議で可決を見たが、世界恐慌や国際情勢の変動もあって停滞したままに終わった。戦後も運動は続いていたが、昭和41年11月、総理府に設置された明治百年記念準備会議は、記念事業の一として「歴史民俗博物館」の建設を採択し、閣議に報告、承認され、これを受けて福岡県でも再び活発な誘致運動が展開されることになった。しかし、昭和45年に文化庁が、「国立歴史民俗博物館」の建設予定地を千葉県佐倉市に内定し、九州国立博物館の構想は挫折感を味わった。

この時、西高辻信貞三十八代宮司は、「国博誘致の灯を消してはいけない」と感じ、天満宮所有の境内地約十四万平米を「国立博物館用地」として福岡

県に寄付した。

昭和六十年代に入って、国博を取り巻く情勢にも変化が生じてきた。それは、国（文部省）に於いては、第二国立劇場が実施設計の段階となり、次の国立文化施設について調査検討する時期になってきたこと、わが国の対外経済情勢が内需の拡大を望んでいることなど。また、福岡県に於いては九州再浮上の核として、国家規模の施設の地方建設が望まれた。太宰府市と連結する四市一町“つくし地区”では、積極的に誘致を歓迎するために、四市一町の首長が、この点を共同声明を持って表明したのである。この音頭を取ったのが、つくし青年会議所で中心的に指導していた西高辻信良宮司だった。筑紫地区の首長による共同宣言の地元へのインパクトは絶大だった。これを契機として、「九州アジア国立博物館を誘致する会」が、昭和63年3月、区長会、商工会、子ども会、ライオンズクラブ他地元有志350名が参加して創設された。

そして、平成元年1月21日九州国立博物館構想具体化へのステップとなる文部省の博物館等整備運営調査費が、大蔵省との折衝で復活し、満額の220万が計上された。

この調査費の計上により、地元10年、天満宮では百年に渡るこの国博誘致運動の大きな関門を突破し、いよいよ建設への道が開けた。

掲示板

平成17年度「バリアフリー化推進功労者」に奥野花代子会員が表彰される

平成18年1月17日（火）、首相官邸大ホールにおいて、平成17年度バリアフリー化推進功労者表彰式（第4回）が行われた。

この表彰は、バリアフリー化推進功労者表彰要領（平成13年11月6日）[平成18年1月16日一部改正]に基づいて、5年間に限り実施されるもので、バリアフリー化の推進について顕著な功績のあった団体や個人を顕彰することで、優れた取組を広く普及させることを目的としており、平成17年度の功労者に本学会会員である奥野花代子さんが選ばれた。

表彰は、「極めて顕著な功績又は功労があったと認められる者については内閣総理大臣」が行い、「特に顕著な功績又は功労があったと認められる者については内閣官房長官（ただし、高齢社会対策又は障害者施策を担当する内閣府特命担当大臣が置かれている場合には当該大臣」が行うもので、奥野会員の表彰は、法人や団体の対象者が多い中での個人受賞で、その功績は特記されよう。

以下に平成17年度の表彰者と奥野会員の表彰事由を紹介する。

【内閣総理大臣表彰】

東陶機器株式会社 特定非営利活動法人大阪障害者雇用支援ネットワーク

【内閣府特命担当大臣表彰】

大牟田住まいまちづくりネットワーク 奥野 花代子 東京急行電鉄株式会社
福岡市交通局 有限会社 雅樹雅 有限会社 ハートフル・ウィング

（五十音順）

【内閣府特命担当大臣表彰】

おくの かよこ
奥野 花代子

神奈川県小田原市入生田499（勤務先：神奈川県立生命の星・地球博物館）

功績の概要

博物館は障害や年齢に関わらずあらゆる人に優しい生涯学習のための開かれた施設でなければならないとの考えのもと、学芸員としてその実現に取り組んできた。

特に、視覚障害者の案内や交流会等を通じた意見交換などを行う中で、視覚障害者が展示物の大きさを知り、手触りで驚くなど博物館の素晴らしさを知って欲しいと考え、「全国の博物館園における視覚障害者への対応に関するアンケート調査」や「全国の盲学校の博物館利用に関するアンケート調査」、シンポジウムなどを行い、全国の博物館の視覚障害者への対応について状況把握に努めてきた。

そして、視覚障害者とともに検証をしつつ赤外線による音声歩行案内・解説システム（トーキングサイン・ガイドシステム）等の機器開発・導入を行ってきた。このシステムは先駆的な取組として、他の博物館や公共機関等にも導入されている。

また、博物館の新設に当たっては、視覚障害者とともに助言・提案・検証等を行うなど、博物館のバリアフリー化に取り組み、「誰にも優しい博物館」を目指している。

（文責：高橋信裕/JMMA事務局）

i n f o r m a t i o n

◆JMMA 銀行口座変更のお知らせ◆

JMMAの銀行口座の支店名が支店統合により下記の通り変更になりました。会員の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、何卒よろしくお願いいたします。

なお、口座番号等の変更はございません。

(新) みずほ銀行 稲荷町支店 (店番号090) 普通預金 No.1740890

「日本ミュージアム・マネジメント学会」

◆文献寄贈のお知らせ◆

・『入間市博物館紀要 第6号』入間市博物館

u o i t e w i o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

阿部 正喜	九州東海大学
伊藤 祥	日本科学未来館
宇仁 義和	東京農業大学生物産業学部
許斐 修輔	佐賀県立宇宙科学館
高野 祐之	高野デザインプロデュース
松尾 厚	山口県立山口博物館
山科 直子	日本科学未来館
山本 広美	日本科学未来館

【学生会員】

小野 裕子	九州大学大学院
高橋 秀之	東京学芸大学大学院

【法人会員】

株式会社コングレ

(五十音順・敬称略)

JMMA 会報 No. 40 (Vol. 10 no. 4)

発行日 2006年3月31日

事務局 〒108-0023 東京都港区芝浦4-6-4 トウセン芝浦ビル2F TEL/FAX 03-3455-1505

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、川瀬伊代、三次泰子、津久井真美 e-mail:kanri@jmma.net